

卯の花の里だより 残暑もきびしかった八月二十六日、私ども（教育委員会、中森成行・辻正）は熱海で開催された「心の花」全国大会に出席した。帰途、新幹線の車中で語り合ったことを紙上対談形式にまとめてみた。

（構成 辻 正）

辻 熱海は坂の多い街ですね。細い道を上ったり下ったりで、熱海市企画調整課の方がわざわざ車を出して案内してくださって、大変助かりました。

中 運転しながらの、宅地造成によって熱海で過ごされた文人たちの住居が取り壊されていく話など、身につまされて聞きました。



大会当日に公開された凌寒荘

凌寒荘の門をくぐり、庭に一步足を踏み入れた時は、チョッピリ感無量でした。凌寒荘という名のいわれは？

辻 別荘の名付け親は、同じ熱海で晩年を過ごされた徳富蘇峰翁で、その出典は、中国古詩で「数枝の梅が寒を凌いで、おのずから花開いている」から採ったものだそうです。先生の自伝「ある老歌人の思ひ出」の「西山の記」の項に出ています。

中 処女歌集「思草」にある『願はくはわれ春風に身をなして憂ある人の門を訪はばや』の銅版がはめ込まれた外扉の感じも、つまましいだけに印象的でした。先生の御孫さんにあたる幸綱先生を中心に、熱海時代十余年を側近で過ごされた村田邦夫先生、それに少女期、信綱先生と出会い、指導を受けられて今日の歌壇的地歩を築かれた石川不二子さん、この鼎談会はとてもよかったですね。それに司会者の俵万智さんの聴き上手には、ほとほと感心しました。この企画は何といっても最高でした。

中 敗戦直後の停電が続く夜、懐中電灯の光で評釈万葉集の校正をされる八十翁信綱の執念ともいう万葉集への思いには、とても深い感銘を受けました。

辻 幸綱先生が会場の人たちに「この中で信綱を実際に見たことのある方は、手を挙げて下さい！」この呼びかけに、すかさず「ハイ」と多数の聴衆が誇らしげに手を挙げられた。――「さすが熱海だなあ」と、感心しました。

中 私は、生誕の地鈴鹿と、終焉の地熱海という二つの点で、信綱先生九十二年の生涯という糸で結ばれ、そのつながりを深めながら新しい文化が芽生え、育っていく――そんな夢を信ずる気持ちになりました。

佐佐木信綱資料館だより

第九号

目次
『思草』など 信綱一首（九） 展示室だより 卯の花の里だより
山中 智恵子 村田 邦夫 辻 正 中森 成行
・鈴鹿市教育委員会文化財保護課 （Tel・〇五九三・八二・一一〇〇） 千五一一三 鈴鹿市神戸一―一八一―一八 ・佐佐木信綱資料館 （Tel・〇五九三・七四・三二四〇） 千五一一三 鈴鹿市石薬師町一七〇七

『思草』など

山中 智恵子

私は、前川佐美雄を師とし、佐美雄は、佐佐木信綱の弟子だから、孫弟子ということになる。そのゆえか、令孫幸綱氏の歌は、その登場当初から親しく拝見している。幸綱氏の歌は、おおらかにして繊細、たわやめぶりともすらをぶりを兼ねている。これは、信綱の血であろう。

治綱氏には、昭和十八年頃に上梓された『永福門院』の名著があり、永福門院を語る時、この書を措けない。

『佐佐木信綱歌集』の緒言に、題材は広くし、思想を深くせねばならぬ。また、人おのがじしの境遇や性格があるから、各々自らの歌をよむべきであると考へたからである。しかしおのれ自らの歌として、歌は純粹な夢と、崇高な善と自然の美とをうたふものであり、深玄な作を歌の極致とするとの信念をいだき来たったのであった。『新月』は前の二集とは異った自由奔放の作風である。

と記している。

第一歌集『思草』の序に、森鷗外は、

あはれ佐佐木ぬしの此の一卷よ、詩のところに従ふ表現の数おほくして、これに応ふる形式の弾力性大いなること、世に詩集はさばにあれど、これに上こすものまた有りぬべしやは。

と、明治三十六年に記している。前記の信綱の志と、

鷗外の言は、信綱の生涯の歌を貫くもので、今に『心の花』の信条となっている。天地のかくろへごとをわが胸にささやくとき水の音かな



山中智恵子先生

『思草』

願はくはわれ春風に身をなして憂ある人の門をとばばや

かちどきのとよみの底にまじるらむ若きやもめの子をす  
かす唄

山の上にたちて我が見る夕づく日明日の夕日は誰ながむ  
らむ

つとめをへて此の世にいづる坑夫らがつく息しろき雨の  
夕暮

月神に第一の杯を湖の神に第二の杯をささげまつらし  
『遊清吟藻』

鴉片いまだよきは覚めざる船僕来て晩食といふなり今日  
も暮るるか

あらしま風吹き過ぎ去れる岸をおほふ群蘆の間にをのの  
きをる船

まがね銚け炎の瀧のなだれ落つる銚爐のもとにうたふ恋  
唄 『新月』

野の末を移住民など行くごときくちなし色の寒き冬の日

大船はいかりを捲きぬいざさらば我らの恋も終ならむか

ふるざとは近江境の山つづき狭霧にうかぶ十月のころ

春の日のゆくらゆくらと山一つあなたへまるる太郎冠者  
かな

以上のような歌を、私は愛惜してゐる。

(かなづかいは原文のまま)

- ※編者注 ①幸綱氏の父君 ②足尾銅山にて ③中国に遊んだとき、洞庭湖上にて ④湘江にて
- ⑤突風、暴風雨のこと。長沙より岳州に向う船上にて

山中智恵子先生略歴

一九二五年五月四日、名古屋市生れ。一九三二年秋より鈴鹿市寺家町に在住。前川佐美雄に師事。「日本歌人」同人。歌集「みずかあらなむ」「星肆」「夢之記」「風騒思女集」等十四冊。

評論「三輪山伝承」「原宮志」など。歌集「星肆」にて第一九回「迢空賞」受賞。他に「短歌研究賞」「C・B・C文化賞」など。

信綱一首・9

「みどり抄」題歌  
寧楽の京にうた人すめり 愛妻も  
歌びとにして此のみどり抄

昭和二六年の未刊歌集『秋の声』から。八〇歳以後の作であるが若々しい歌調は爽やかであり、愛弟子前川佐美雄の愛妻みどりの集を寿ぐにふさわしい題歌。伊勢物語を踏まえた初句の出も瀟洒で、しかも師たる愛のまなざしは澄み徹って清く深い。いわゆる挨拶の歌も、この人は常に堂々と詠み据えていた。(村田邦夫)

展示室だより

山中千恵子先生の玉稿の冒頭に「私は、前川佐美雄を師とし、佐美雄は佐佐木信綱の弟子だから、孫弟子ということになる。その……」云々とある。信綱略年譜によると、前川氏が竹柏会に入門したのは大正10年19歳の時で、以来87歳で亡くなるまで、思想や歌風は異なっていたが恩師信綱への敬愛の念は、変わらなかつたという。(歌人村田邦夫氏の話) 昭和30年5月、南都薬師寺に建った歌碑「ゆく秋の大和の国の……除幕までの前川氏の献身的な努力は信綱の筆になる「九月の旅」にくわしい。※「心の花」六八二号 昭和30年8月号。このような驚実さからか公刊された歌集の多くが献呈され、いま資料館に収められている。手許の収蔵品目録からそのいくつかを次に掲げておく。

- ・植物祭(昭和5年、27歳)・寒夢抄(昭和22年、44歳)
  - ・炎(昭和29年、51歳)・捜神(昭和39年、61歳)・白木黒木(昭和46年、68歳)・大和六百歌(同上) など。
- 佐々木秀綱氏より寄託された図書―多く寄せられた図

書のうち、最近の主なもの―(1)校本万葉集(増補版)18冊、別冊3冊。(2)類聚古集(覆刻版)4巻。明治45年、41歳の信綱が明治天皇に御説明申し上げた三種の古写本、すなわち水野家旧蔵本の元暦校本万葉集14冊本と原三溪蔵の藍紙本万葉集と共に、日本近代万葉研究史の資料のうち主眼となるものである。

市教育委員会購入の万葉関係図書―(1)仙覚律師奏状覆刻本。鎌倉中期の学僧仙覚が、万葉集研究の結果、従来無訓の歌に新点を加えた研究書に添えて後嵯峨上皇に奉った文書。(2)定家自筆本近代秀歌。藤原定家が源実朝に与えた和歌入門書。これにより資料館にある定家自筆金槐集(原寿枝子氏寄贈)と、好一对をなすことができた。(1)(2)は信綱の発見による書の原本複製で、信綱の解説が付いている。(3)定本万葉集。信綱と武田祐吉とが協力し、昭和15―23年に刊行した。5冊からなっている。

(文化財保護課 辻 正)